

国際看護研究会 NEWSLETTER No. 36

Japanese Society for International Nursing

2005. 1. 27 発行

昨年は皆様にご協力いただき、誠にありがとうございました。本年もどうぞよろしく
お願い申し上げます。

本号の内容は以下のとおりです。

I. 運営委員会報告	p. 1
II. 国際看護研究会第8回学術集会準備委員会報告	p. 1
III. 第35回国際看護研究会報告	p. 1
IV. 第36回国際看護研究会のお知らせ	p. 5
V. スタディーツアー参加者募集	p. 5
VI. その他	p. 5
VII. 皆様へのお願い・お知らせ(事務局より)	p. 6

※本文に記載されている振込先やメールアドレスについては、現在は使われておりませんのでご注意ください。

I. 運営委員会報告

第38回運営委員会は2004年11月13日(日)に開催された。スタディーツアー、運営委員選挙日程等について話し合った。スタディーツアーについては、NEWSLETTERを通じて募集すること、治安状況を見極めて実施の判断をすることとなった。運営委員選挙は選挙管理委員を須藤晃代氏、高田恵子氏の2名にお願いし、1月29日(土)に運営委員会を開催して実施手順を確認し、2月上旬に会員に対して投票用紙を発送し、2週間の期間で投票を依頼、3月5日(土)に開票結果を受けて運営委員会で協議することとした。この日程確定に伴い、3月の講演会は通常第3土曜日に開催するところを第1土曜日の5日に実施することにした。

II. 国際看護研究会第8回学術集会準備委員会報告

第1回委員会を1月15日(土)に国際協力機構青年海外協力隊広尾訓練研修センターで開催し、担当を決め、本年9月10日(土)の開催に向けて協議した。4月上旬から7月半ばまで演題募集を行う予定とした。

会員の皆様のご経験、ご研究成果の発表をお願いします。

III. 第35回国際看護研究会報告

第35回国際看護研究会は、「ラオスの郡・村落における助産師活動」をテーマに佐山理恵氏(国際協力機構青年海外協力隊助産師隊員)にご講演いただきました。

< 講演 >

ラオスの郡・村落における助産師活動

国際協力機構青年海外協力隊助産師隊員
(青年海外協力隊 14-2 次隊) 佐山 理恵

2004年12月12日に、2年間にわたるラオスでの活動を終え、帰国いたしました。ここではその活動について紹介させていただきます。

青年海外協力隊に私が参加しようと思った理由には、看護職を志した時からの思いがありました。メディアを通して海外で働く日本人看護職の姿を見て、大いに感動したというのが看護職をめざしたきっかけでもありましたので、自身もそうした活動をしたという思いがずっとありました。そして、今回青年海外協力隊助産師隊員としてラオスで活動させていただきました。

ラオスは、国境を中国・ベトナム・カンボジア・タイ・ミャンマーと接する東南アジア唯一の内陸国です。南方・上座部仏教の国ですが、63もの民族を抱えるといわれる多民族国家でもあります。アジアの中では最も発展が遅れている国の一つに挙げられますが、それは保健衛生分野にも現れており、高いU5MR（5歳未満児死亡率）や妊産婦死亡率をみても明らかだといえるでしょう。また、内陸国らしい特徴はこの分野にも影響します。特に、首都ビエンチャンはタイとの国境に位置し、メコン川を挟んですぐのところのタイの町が広がっているため、ラオ人によるタイの医療施設利用も一部進んでいます。「お金を持っている人はタイで治療」が首都の人々には一般的になってきています。言語は国語であるラオ語ですが、これも多民族国家であるため国土すべてで通用するわけではありません。私の任地は首都ビエンチャン内の郡であったため、ラオ語が問題なく通用する環境でした。看護職については、免許制度はなく「病院に就職した人」が「看護師を名乗る」という状況が見られます。看護学校の整備が進んできてはいますが、現場ではその卒業生を十分にうけ入れられるところまで追いついてないのが現実です。

配属先のサイセター郡病院は、ビエンチャン市内に位置する人口8万人を抱える郡の保健分野の中心(郡内病院1箇所、ヘルスポスト4箇所)でした。ここの郡病院のスタッフは20人あまりですが、その少ないスタッフ数で、地域の医療機関(ベット数約6床)としての役割とPHCの中心的役割の両方を一手に担わなければならないだけでなく、個々のスタッフが多種多様な業務内容を抱えているため、基本的な人事管理の問題をまず感じたのを覚えています。これは、私が配属された母子保健科でも顕著であり、スタッフは医師1名(カウンターパート)、看護師3名の4名でしたが、そこでは妊婦健診や分娩介助、婦人科、家族計画といった院内業務からEPI、地域巡回、8万人分の母子保健統計処理といった院外の仕事までこなさなくてはならない状況でした。スタッフのモチベーションも、よくて月20ドル程度でそれでは全く生活できないという低い給与も手伝ってか、なかなか向上しないように映りました。こうした病院内の状況から、もう一度PHCを担う場としての病院・母子

保健科としての機能を考えようと思い、スタッフと共に村の人々の実態を知ろう、と院外に積極的に出ていったことが活動の大きな転換期となりました。

村の人々の実態を知るにつれ、病院には行くことができない母子がたくさん村に存在することが分かり、また郡病院自体もスタッフの少なさなどにより、まだまだ管轄地域全体の把握ができていないことを理解しました。そこでそうした問題に対して、以下の活動を行ってまいりました。

① 院内母子保健業務改善

主に、妊婦健診・分娩介助に関する技術移転。各スタッフの実施内容の格差をなくすとともにキーパーソンになるスタッフを決めて、彼女から周囲に伝達していけるようにする。また、目指すは日本の助産院と考え、妊産婦の経済的負担にもなりうる医療行為の必要性をよく考えて介助していけるように努めた。

② ヘルスポストレベルアップ

働いているのは保健・医療の教育を受けていないスタッフがメインだが、地域に最も近い医療機関としてヘルスポストが求められている。郡病院での集中トレーニングのあと、巡回指導を行い全ヘルスポストでの妊婦健診が可能となる。

③ 産後家庭訪問

院内分娩であっても早くて2時間で帰宅することや、産後炭の上に座るといった慣習の健康への影響を考えて、産後フォローを目的として導入した。またなかなか院内分娩利用者数が伸びないこともあるため（80%以上が自宅分娩）、それを伸ばしたい院長の思惑と重なり、プロモーションの意味も込めて開始した。対象は院内出産者と、妊産婦・新生児死亡例など必要時で、内容は基本的健診と個別保健指導であった。この活動では副産物として、各村々と母子の置かれている状況、潜在している障害者の問題などに対してスタッフの地域母子保健への理解が進むという様子が見られた。さらに、患者と個別に深く触れ合ってそのニーズを体で感じていくことでモチベーションアップにもつながったように思われる。



④ 村落ヘルスボランティアへのアプローチ

活動が下火になっていたオーソーボー（家族計画村落ボランティア）の活性を図ることを目的としたが、それには絶対的なスタッフ不足のなかで、自村の母子保健状況をよく知るオーソーボーの貢献を具体化する意味もあった。パイロット村での現状把握から始まり、郡内全オーソーボー対象のワークショップでは、ディスカッション「オーソーボーって何？」などを実施しモチベーションアップを図った。また、高齢で文盲の方も含まれたため、まず地図を使用したマーク式の妊婦把握を導入し村内母子保健の



理解を促した。このワークショップに臨むに当たって、当初は「オーソーボーはあまりやる気がないだろう」などとカウンターパートとのミーティングで話していたのだが、それは大きな間違いであった。彼女たちのワークショップに臨む姿勢は実に積極的で、ディスカッションもやる気に満ちたものであった。彼女達はボランティアであり報酬は一切なく、このワークショップも日当はおろか交通費もでてはいないのだが、それに対する言及も一切なかった。彼女達にとって、母子の問題は自分たちのすぐそばで起きている問題であり、とても身近で重要な問題として捉えていることがよく分かり、その姿勢には頭が下がる思いであった。その後、各村巡回にて個別フォローを実施した。バイクでの移動となるため雨期に阻まれ、予定通りには全く進まず、3村を残したまま任期終了になったことが心残りである。

また、こうした活動の中で、自分のなかでどうしても答えが出なかった問題もあります。それは、産後家庭訪問の中でも述べましたが、ラオスの産後慣習「ユーファイ」についてです。大まかに言えば、産後3日間～1ヶ月間、土間にあしらった炭の上または横で過ごすというものですが、それは母子を外敵から守る、魔よけといった意味があります。その他、親類縁者へのお披露目期間といった側面もありますが、その期間には様々な禁忌・制限もあります。1ヶ月間もち米と醤油だけ、などといった食事制限(家によって異なる)から行動範囲制限までいろいろあり、時としてそうした制限が図らずも母子の健康を阻害してしまうことがあるのです。保健省はこのユーファイの廃止を謳っていますが、強く根付いた慣習ですから現実的ではありません。

慣習が生まれたことにはどこかに理由があるはずであり、そうした伝統・慣習を守っていくことは重要です。それは実施する人のアイデンティティにも関わる重要な事柄でもあります。しかし、活動の中で関わったいくつかの事例では、図らずもその慣習によって健康を害してしまう母子がいたのも事実です。そうした場面において、医療者に求められる姿勢はどのようなものなのか？私は活動期間を通して考えましたが、何も言うことができませんでした。ただ、こうした慣習も少しずつ変化してきているようです。今後の自分の課題としてこれからも考えていこうと思います。

この2年間で学んだこととして「基本に立ち返って助産の技術を大切にする」ということが挙げられます。日本で勤務していた時期は、医療機械に囲まれそれを頼りにすることが多く、「人間が人間を看護する」ことの意味をついついおろそかにしてしまいがちだったと思います。ラオスでの2年間で、医療機械がないから何もできない看護・助産師になるのではなく、まず自分自身が持つ技術をフルに使うことがいかに大切であるかを考えるようになりました。また、対象の個別性を考慮したケアの実施という観点からは、対象をいかに統合的にみることができかが重要であると実感しました。地域・家族・文化などの背景をいかに捉えることができるか、それは国・場所を問わず看護の場面においては必須であり忘れてはならないと改めて思う日々でした。

さらに、今後の国際協力における看護職の可能性について、私はもっといろいろな分野

の専門家と協力していける、と考えます。なぜなら、先に述べたように看護職は「人」の全体像を統合して捉えることができる(そういう訓練を受けている)職業であり、その視点にはときに、異文化の中で活動する国際協力の分野で必ず役立つと思うからです。自分自身の看護観を常に考え、日本でも海外でも「看護職であること」の意味をいつも考えて活動することが大切であると考えます。

最後に、お酒好きで、愉快で、あたたかなラオスの人々に囲まれて2年間楽しく活動できたことを心から感謝いたします。コップチャイ。

IV. 第36回国際看護研究会のお知らせ

第36回国際看護研究会は、下記の通り開催されます。皆様奮ってご参加ください。

日 時：2005年3月5日(土) 13:00~15:30

会 場：国際協力機構青年海外協力隊広尾訓練研修センター
東京都渋谷区広尾 4-2-24

テーマ：「日本国際緊急援助隊 スマトラ沖大地震救援活動内容と危機管理」

講 師：日本国際緊急援助隊メンバー

中田敬司 氏(スリランカ派遣：日本安全工学研究室、岡山大学医学部保健学科)

吉岡留美 氏(スマトラ派遣：JA-LP ガス情報センター安心コール事業部)

V. スタディツアー参加者募集

前回のNEWSLETTERでご案内しましたが、まだ参加申込可能です。特に途上国の現状を知りたいという方にお勧めします。お問い合わせはEメール、もしくはファックスにてお願いします。

期間：2005年3月19日(土)~27日(日)

訪問地：ネパール国カトマンズ、ポカラ

訪問先：ハンセン病病院、保健ポスト、精神障害者デイケアセンター、看護大学、コミュニティ等。地方の保健医療事情も視察予定

費用：約20万円

問合せ先 Eメール：kokusaikango@iris.ocn.ne.jp

VI. その他

JICAでは健康管理員を2月頃募集する予定です。これは開発途上地域に派遣されているJICA関係者の健康管理支援業務(健康状態の把握、健康相談、医療情報の提供等)を行うものです。応募資格は①看護師免許の所持、②臨床経験3~5年程度(以上)、③海外での医療関係業務経験、④英検2級程度あるいはTOEIC600点相当程度の英語力、⑤在外での業務に耐えうる、心身ともに十分な健康を有すること、です。途上国でまたぜひ仕事をしたいとお考えの方は、JICAのホームページ(近々募集要項掲載予定)をご覧ください。健康管理センター(後藤さん、金城さん)にお問い合わせください。

Ⅶ. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）

事務局より

1. 研究会は会員の皆様からお振込頂く年会費（2千円）により運営されています。2004年度会費をまだ納めていない方は至急お振込をお願い致します。本年度が新運営委員選出のための選挙を実施する予定です。被選挙者は本年度会費納入が条件となっております。会費納入状況についてのお知らせを同封しました。お振り込みになっているにもかかわらず、この記載と一致しない方はお手数ですが、事務局にご連絡下さい。
2. 転居された方は研究会事務局に新住所をご連絡下さい。
3. NEWSLETTERの「海外情報」に掲載する記事を募集しております。会員の皆様の活動報告、活動国の様子、医療事情、あるいは旅行記など海外に関する情報をお待ちしております。事務局までお送り下さい。
4. 会員の皆様からのご意見を反映して研究会の活動の更なる改善を図りたいと思います。講演会のテーマ、NEWSLETTERについてなど、本研究会へのご意見をお聞かせ下さい。
5. 第7回学術集会抄録の残部があります。ご希望の方はその旨明記の上、抄録代として500円分の切手（80円までの小額でお願いします）と返送先を書いて210円分の切手を貼ったA4サイズ用の返信用封筒を事務局までお送り下さい。
6. 研究会HPのURLが変更となりました。これまで滞っていましたが、今後HPの充実を図り、情報を更新していきたいと考えています。

新URL：<http://www15.ocn.ne.jp/~jsin/>

編集後記：年末のスマトラ沖の大地震では自然の猛威に驚きと恐ろしさを感じ、またあまりにも多くの方々の犠牲に辛さと悲しみでいっぱいです。予期しない緊急事態にどのように備え対応していくべきなのか、他人事ではなく自分自身のこととしてしっかり考えていくことの必要性をあらためて強く感じました。被災地の早期の復興をお祈りいたします。
(名)

昨年、日本を、そして世界を襲った災害は、多くの死者、被災者と経済的損失を残した。また自然災害だけでなく、イラクやパレスチナの紛争、テロと、まさに「災」の文字に代表される一年であった。たとえばスマトラ沖地震をみても、そこには自然の猛威と言い切ることのできない、社会経済的な要因、南北の格差が見え隠れする。被災者への支援とともに、根本原因に対する取り組みが、私たち国際看護標榜する者の責務であろう。(柳)

※ニュースレターの記事に関して無断転載を禁じます。

皆様のご理解をお願いいたします。